

JAL2016 はじめに

本書は、平成 28 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）に基づく「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」（実施期間 2016 年 11 月 28-12 月 9 日）の最終日 12 月 9 日に開かれた公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 III」（以下、WS3）の報告書です。

この事業の略称である JAL2016 の JAL とは、**Japanese-art librarian** であり、海外において日本美術の資料に携わる司書を日本に招き、日本における美術資料・情報の現況を多面的に触れていただきながら、関係者との交流を図るもので、2014 年度が初回で今年度は三度目の、そして最終の開催となりました。

JAL は **librarian**、司書を主な対象としておりますが、加えて、アート・アーキビスト (**art archivist**)、視覚資料司書/学芸員 (**visual resources librarian / curator**)、さらに視覚資料をおもな研究対象資料とする日本研究者も応募可能な対象者といたしました。本書巻末に掲載の募集要項においては、下記のように記載しております。

a) 日本国外において日本美術に関わる文献および視覚資料の扱いに携わる図書館員

A librarian working on Japanese-art-related literature and visual materials outside Japan

b) 日本国外において日本美術に関わる文献および視覚資料の扱いに携わるアーキビスト、ヴァジュアル・リソース・キュレータ

An archivist or a visual resources curator working on Japanese-art-related literature and visual materials outside Japan

c) 日本国外において日本美術の関わる文献および視覚資料を用いて日本研究に従事している者

A Japanologist using Japanese-art-related literature and visual materials outside Japan

日本美術の範囲については、「写真・映像・マンガ・デザイン・建築等の視覚芸術全般」を含むものというようにながりの広範囲といたしております。以上は、初回（JAL2014）からの要項と同じです。

JAL2016 実行委員会¹⁾は、平成 28 年度の始まりとともに組織され、海外関係諸機関 (IFLA、NCC、EAJRS 等) のメーリングリストに公募情報を流しました。初年度より多く、二年度と同じく、異なる国々からの照会がありました。8 月に実行委員による選考会議の結果、本書において WS3 でのプレゼンテーションを記録掲載する 9 名が招へいされました。

昨年度の初回の 7 名が日本人の JAL、つまり日本人で海外において日本美術の資料を扱う専門家であったのに対し、二年度と同様に今回もピッツバーグからの一名を除き、日本語を母語としない 7 カ国 (イタリア、デンマーク、イギリス、フィンランド、USA、オーストラリア、ブルガリア)、9 都市 (ヴェネツィア、コペンハーゲン、ケンブリッジ、ヘルシンキ、

ナポリ、ピッツバーグ、メルボルン、ソフィア、ジェノヴァ)からの参加でした。この9名が体験した日本語での研修、日本語でのWS3でのプレゼンテーションの困難と負担は、昨年と同様、とてつもなく大きなものでした。

今年度の募集要項においても、二年度のときと同じように多様な国籍の方を招くことを意図して、日本語での日常の会話は必須の条件でしたが、WS3におけるプレゼンテーションなどにおいては、言語的障壁を緩和するために、日英バイリンガルのプログラムコーディネータを設けるなどの工夫と配慮をいたしました。であつても、国籍も母語も異なる招へい者が集い、共同作業としてのプレゼンテーションを成し遂げるに必要なだった、彼ら9名のWS3にかける熱意と奮闘には、驚きながら、深い尊敬の念を覚えたことは昨年度と同様でした。

11月28日より、東京・京都・奈良の8機関を訪問しながら研修と相互の親睦を深めて、招へい者はほぼ3日間の準備とリハーサルを経て、そして最終日のWS3の当日を迎えたのでした。

掲載のプログラム(p.6)の通り、10:30から始まったWS2は、馬淵実行委員会会長の挨拶、水谷副委員長の基調報告に続いて、午前中に招へい者各人の自己紹介、午後にはブカレスト大学日本研究センター所長のアンカ・フォクシェネアヌ教授による特別招待講演、そして招へい者が3人ごと3グループに別れて、「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言III」を試み、最後にはフロアとの質疑を交えてのパネルディスカッションとなりました。

WS3のタイトルを2014-15年と同様「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」としたのは、5つのJAL2016の目的²⁾の一つであり、その中でも特に大きな眼目であった、「日本の美術情報資料の基盤を客体化する」ことを狙ってのことでした。

その目的の達成については、ぜひとも招へい者ならびにコメンテータの精力的なプレゼンテーションの記録をご覧いただき、ご批評を賜れば幸いです。

WS3を終えて後、翌年2017年2月3日、実行委員および関係諸氏による、アンサー・シンポジウム「JAL2016WS「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言III」への応答 — “またもや”感を越えて」を開催しました³⁾。このアンサー・シンポジウムの開催は、JALからの真摯で的確な「提言」を単に受け取り、その記録を報告書に残すだけでこのプロジェクトが収束(終息)するので良いのか?というWS3の最終ディスカッションにおけるフロアの参加者からの、いささか手厳しい指摘があったからでありました。

もちろん、実行委員においても、二年目のWS2の報告書の中に「JAL2015招へい者の提言に応答することの試み」を加えたように—これはWS2の後に、「JAL2015事後報告会」を開いて、今回のJALの成果と課題を検証し総括する機会を設け、招へい者の残した提言にいささかでも反応し答える責務が実行委員会にあることを確認してのものでしたが—提言に応答し、それをもって現状の改善への指針を示したい、示すべきであるという責務感がありました。

アンサー・シンポジウムについてはその議論の全文を本報告書に収録しております。庵さ^シンポジウム後、実行委員会は、JALプロジェクトの3年間の総括ともいふべき「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための課題解決についての提案」を策定し、これも併せて収録しましたので、ぜひご覧いただけたら幸いです。この「提案」は、JALプロジェクトの中から生まれたものでありますが、JAL、日本美術の図書館(員)の課題にとどまらず、

広く日本の文化資源に関わる資料と情報の日本からの発信、ならびに海外の日本研究において現在生じている事柄の全般にほぼ当てはまる、課題の表出と解決への指針となっているのではないかと自負しております。

本プロジェクトは文化庁の補助金によるものであり、当初から3年間の計画でスタートいたしました。今後もJALプロジェクトは姿を変えて、なんらか継続されることを期待しつつ、3年間に25名のJALからいただいた提言にいささかでも応答することを継続しなければと考えております。

最後に多くのご協力、ご支援をいただいた関係各位に深くお礼申し上げます。

2017.3.31

JAL2016 実行委員会

註

1) JAL2016 の実行委員会は、委員長に馬淵明子（東京国立近代美術館長）、副委員長に中林和雄（同副館長）、副委員長兼事務局長に水谷長志（同主任研究員）、委員に谷口英理（国立新美術館）、田良島哲（東京国立博物館）、山梨絵美子（東京文化財研究所）、江上敏哲（国際日本文化研究センター）、栗田淳子（国際交流基金）、赤間亮（立命館大学）

2) 水谷長志「基調報告およびアンサー・シンポジウム」(p. 10-14) に記載。

3) 水谷長志「E1881・JALプロジェクトから得た3度の「提言」を考える」『カレントアウェアネス-E』No.319, 2017.02.09

<http://current.ndl.go.jp/e1881>

謝辞

JAL2016 の実施にあたり、貴重なご助言、ご協力をいただいた下記の皆様に深く感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

村田良二、住広昭子、酒井晶（東京国立博物館）

橘川英規、皿井舞（東京文化財研究所）

宮崎幹子、嘉数周子（奈良国立博物館）

鈴木桂子（立命館大学）

山本和明、長澤愛（国文学研究資料館）

Prof. Dr. W. F. Vande Walle, Chair, EAJRS, KU Leuven

Arjan van der Werf, Secretary, EAJRS, KU Leuven

Pekka Karhula, Library, Helsinki University

Prof. Gennifer Weisenfeld, Dean of the Humanities, Professor of Art History & Visual Studies, Duke University

Kristina K. Troost, Head, International Area Studies, Japanese Studies Librarian, Duke University

Prof. Anca Foçsenanu, as special invited lecturer, Head, Japanese Language Department, Director, Center for Japanese Studies, University of Bucharest

Jiyeon Wood, as Program coordinator of JAL2016, Library, SOAS, London